

エデュコ
Edulico

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

No.67
2025年

浅川
智恵子さん

日本科学未来館 館長
IBMフェロー

巻頭インタビュー p.2



知っておきたい教育 NOW p.4

- ① 子どもたちの“生きる力”を育む
- ② 一人一人に寄り添い、生徒を笑顔に変え
もっともっと楽しい学校へ

きょういく見聞録 p.8

コシヒカリでつながる南国鹿児島と北国新潟の
学びの交流ネットワーク

地球となかよしトピックス p.10

芝生学から広がるSTEAM教育
～「島・人・海」をつなげて考える～

Information 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14

【連載第2回】

子どもの心理とコロナ禍
～苦難を生む“何ものか”を探る～

Front Runner p.15

【連載第3回】

戦後80年—
資料館が新たな語り部に

ほっとな出会い p.16

文芸評論家 三宅 香帆さん

一つをやり遂げて道を拓く

日本科学未来館 館長
IBM フェロー

浅川 智恵子さん

行きたい場所に行き
知りたいことを知る自由の喪失

子どもの頃、将来の夢は「水泳でオリンピック出場」でした。テレビで見た水泳競技大会やオリンピック。1コースから順に名前を呼ばれてスタート台に立つ選手、合図と同時に飛び込みトビウオのように泳いでゆく、その颯爽たる姿に憧れたのです。「まずは練習に励まなくて」と考え、小学5年生の夏休みから水泳教室に通い始めました。自分で言うのもなんですがスポーツ全般が得意だったので、水泳もみるみる上達し速く泳げるようになっていきました。

ところが、夢は突然絶たれてしまいました。夏休み明け、水泳の授業でプールの壁にぶつかり、それが原因で視力を失ったのです。手術の甲斐もなく徐々に視力が落ちてゆき、中学2年の頃には完全に見えなくなりました。オリンピックどころか、一人ではどこにも行けなくなり、知りたいことがあっても本も読めない。私自身の研究テーマに寄せて言うならば、14歳で「移動と情報のアクセシビリティ」を失ったのです。

「誰一人取り残さない」
先生の想いを感じた中学時代

地元の中学校にそのまま通っていましたが、黒板も教科書も読めないので授業についてゆけなくなりました。耳

から入る情報が
多い音楽や国語
の授業はかろう
じて理解できる

箇所もありましたが、図形やグラフなどが多出する数学は何をやっているのか全くわからず、ボーっと聞いているだけ。ところが、3年生にな

ってしばらくしたある日、数学の先生が手でさわってX軸とY軸の位置関係がわかるグラフを厚紙で作り、それを使って放課後に個別授業をしてくださいました。「この子にも数学を教えたい」という先生の強い思いが伝わってきて、そこから数学も諦めずに取り組むようになりました。

もう一つ、心に残っているのは修学旅行です。小学校6年生の時点でかなり見えづらくなっていたため「何かあったら困る」と小学校の修学旅行は保護者同伴を求められたのです。しかし、中学では何も言われることなく普通にみんなと参加しました。職員室では反対の声もあったと思いますが、おそらく担任の先生がとりなしてくれていたのでしょう。

「誰一人取り残すことなく学ばせたい」と工夫し挑戦する先生の姿勢を子ども



PROFILE

日本科学未来館 館長。IBM フェロー。カーネギー・メロン大学客員教授。東京大学先端科学技術研究センターフェロー。1985年に日本IBM株式会社 東京基礎研究所に入社し、日本語デジタル点字システムや、ホームページ・リーダーなど視覚障がい者を支援するアクセシビリティ技術を開発する。2003年米国女性技術者団体(The Women in Technology International) 殿堂入り。2004年東京大学工学系研究科先端学際工学専攻博士課程を修了。2013年 紫綬褒章受章。2019年に全米発明家殿堂入り。

私たちはちゃんと見ていますし、その思いは伝わります。失明したことは辛かったけれど、サポートしてくれる友達も増え、3年生になってからは学校が本当に楽しかったですね。

真の多様性がある世界とは？

多様性がある社会とはどのようなものか？と問うときに、私が理想とするのは、多様性のある人を受け入れましよう、という考えではなく、多様性がありまよう、となる世界です。講演会などで「浅川さんは目が見えないのに仕事も子育てもできてすごい」と褒めてくれるかたがいるのですが、私にとってはなにも特別なことではありません。目が見えなくても耳が聞こえなくても「仕事してあたりまえ、子育てしてあたりまえ」という世界になるのが理想的だな、と。

その鍵となるのが統合教育です。さまざまな特性をもつ人が身近にいない状態では、「多様性」という言葉の意味を知っていても、なかなか「あたりまえ」にまで思考が行き着かないのではないのでしょうか？ 私に2021年に日本科学未来館の館長に就任した際は、スタッフたちも最初は苦労したと思います。ですが、日々の業務を通してお互いを理解していくことで今は過剰な配慮はありませんし、「浅川館長、仕事についてすごい」とは思っています（笑）。多様な特性をもつ人々が身近にいて、あたりまえに活躍する。それが真にインクルーシブな社会なのだと思います。

イノベーションに必要なのは社会における相互理解と挑戦

私が研究の最終ゴールとして掲げているのは「テクノロジーで視覚障がい者の視覚を補うこと」です。目標は大きいほうがいいだろうと描いた「夢」でしたが、昨今の生成AIの発達によりその夢が現実になんて近づいてきたと感じ

ています。目下開発中であるAIスーツケースは、視覚障がい者の移動を支援する自律型ナビゲーションロボットですが、カメラが捉える映像を生成AIで解析し、ユーザーに周囲の状況を伝える機能が実装できれば、移動のアクセシビリティは飛躍的に向上するはずです。

自動運転の車で目的地に到着し、止まった場所でAIスーツケースのようなロボットに迎えられレストランまで案内される。障がいのある子どもたちが何の不自由もなくみんなと同じ学校で学ぶ。そんなことが技術的に可能となる時代がすぐそこに来ています。

ただし、このようなイノベーションが社会実装に至るまでには、インフラや法律の整備はもとより、社会的なチャレンジが不可欠です。例えば、目の見えないう人が自動運転の車に一人で乗るといふ状況を今の日本社会が許容できるのでしょうか？ 「何かあったらどうするか」という議論が起こり、それを乗り越えてゆく必要が出てくるでしょう。変化や挑戦を恐れず、みんなで社会課題を解

決する未来。それが多様性の先に広がる新しい世界であるように思っています。

選択肢が少ないことが最大の強みだった

失明した時、私が新たに立てた目標は「自分にしかできない仕事を探して自立したい」ということでした。大学卒業の直前に目が見えなくても情報処理の仕事をしている人がいることを知り、「これかもしれない」と視覚障がい者のためのコンピューター職業訓練コースに飛び込みました。1982年。インターネットの登場はまだ先のこと。音声読み上げ機能などもない時代です。もともと理数系科目が得意でもなく、点字でプログラミングの仕組みを学ぶことは想像以上に大変でした。中学生の時の数学と同じく「何をやっているのだろう？」という期間は1年ほど続き、2年めでなんとか理解できるようなってききましたが、成績はさほどふるわず、どんなキャリアにつながるかも未知数。「向いていないのかもしれない」「こんなことをしても意味がないかもしれない」という先の見えない不安とも闘い続けた2年間。しかし、プログラミングは私の初めての「軸」になり、そこから人生が拓けていきました。

「どうしてそこまで努力できるのですか？」とたまに聞かれますが、単刀直入に言うところ「他に選択肢がなかったから」です。視覚障がい者が就ける職業はあま

りにも限られていて、そもそも選択肢が少なかった。諦めたらまた一から何かを探し、膨大な時間と労力をかけて習得しなくてはなりません。後に引けず、やり遂げるしかなかった。でも、選択肢の少なさが私の最大の強みだったのかもしれない。視力を失ってから、やると決めたことを途中でやめたことはなかったですね。

子どもたちに伝えたいこと

進路や生き方に悩んでいる子どもたちに言いたいのは、誰かと比べることなく、自分らしい人生を歩んでほしいということ。そして、まず一つ、どんな小さなことでもいいから、自分で決めたところまでやり遂げてみてほしい。他の人のほうが上手で「自分には向いていないのかも」とくじけそうになっても、自分の「軸」を一つつかんでほしい。たった一本の細い軸が柱のように太くなることもあれば、思わぬ別の軸を引き寄せてつながることがある。そうして世界を少しずつ広げながら、自分の人生を歩んでいってほしいと思います。

疲れたときは、息抜きがてら日本科学未来館に遊びに来てください。テクノロジーの目覚ましい進化によって、不可能であったことが可能になってゆく道筋が見えるはずです。未来は明るく、諦めなければ道は拓ける。私はそう信じています。



●白杖とスーツケースを持つと、両手がふさがることによって不便を感じていたことから発案した「AIスーツケース」

多様な学びを考える

子どもたちの「生きる力」を育む

八王子市教育委員会学校教育部
統括指導主事 狩野 貴紀

八王子市教育委員会学校教育部
教育指導課 課長補佐
長田 智久

ポイント

- ① 不登校対策に必要なのは外部関係者と協働するマネジメント力と実行力
- ② 不登校の原因は多様であるからこそ、一人一人に応じたアセスメントが重要
- ③ 改善だけでなく、得た知見を横展開し、不登校の未然防止を図る

開校に至る背景とこれまでの経緯

平成13年度の時点において、本市の不登校児童・生徒の割合は1・44%であり、国（1・23%）や東京都（1・30%）を上回る状況であった。そうした状況を踏まえ、それまで実施していた適応指導教室や総合教育相談室等での対応に加え、不登校児童・生徒に応じた教育課程を実現できる小・中一貫教育を推進する新しい学校として「八王子市立高尾山学園小学部・中学部」を設立することとし、平成14年4月に教育委員会に新校開設準備担当を設置した。

その後、国から構造改革特区構想が示されたため、同年8月に本市の構想を踏まえ①教育課程の編成、②授業時

数、③教育課程の基準について規制緩和の提案を行った。これらの学習指導要領に基づく教育課程の弾力化を実現する提案に対し、文部科学省から「学校教育の目標を踏まえつつ、習熟度別の教科指導や個々の児童・生徒の実態に即した適応指導、不登校児童・生徒に配慮した教育がなされるものである」との見解が示され、翌年4月1日「不登校児童・生徒のための体験型学校特区」の申請に至り、4月21日に特区第1号として認定を受け、平成15年10月1日から同年12月26日までのプレ開校を経て、平成16年4月に開校した。



● 転入する前に「やまゆり教室」に通うことで、児童生徒はゆつくりと学園生活に慣れてゆくことができる

が多く確認されたためである。そこで、高尾山学園が市の不登校施策の実践校として機能するためには、教育委員会と一体になった学校経営力が必要となるとともに、市内全体の不登校児童・生徒を意識した広い視野をもち、医療や福祉との関係を含む、学校内外の多様な人材を効果的に活用するマネジメント力が必要と考え、民間人校長を配置することにした。

次に、高尾山学園希望者を対象とした「適応指導教室（やまゆり教室）」を学園内に開設し、年間を通していつでも通うことができる体制を整備した。心理相談員による専門的な立場からの子どもへのアセスメントをもとに、一人一人の状態に応じて、学園へのゆるやかな転学をサポートするとともに、将来の自立に向けた支

援を行うこととした。

さらに、不登校の背景として集団の中での行動やコミュニケーションに課題のある子どもたちが多いことから、校内に「特別支援教室」を設置し、そこでの指導を通してコミュニケーションスキルの育成など、情緒障がい等の専門性の高い教員の指導を受けることができる体制を整備した。こうした取組のもと、学校で学ぶ意欲を取り戻した子どもたちが学園へ転入することになり、転入後の登校も安定して現在では平均80%程度の登校率となっている。

高尾山学園での取組

高尾山学園では、不登校になった子どもたちが通いやすいように、一人一人に対応した学習内容や学習方法に加え、子どもたちの心に寄り添うためのさまざまな工夫や配慮がなされている。その工夫の一つが、授業に出られないときにいつでも利用できる三つの「居場所」である。体調が悪いときに限らず利用可能な「保健室」。心理相談員やスクールカウンセラーとのおしゃべりで気持ちをリフレッシュすることができる「相談室」。友だちと遊ぶことで元気を取り戻すことができる「プレイルーム」。いずれにも専任スタッフが常駐し、児童・生徒の対応にあたっている。

学園の授業では、一人一人の学習レベルや習熟度に合わせたコース別授業を実施している。また、体験活動は意図的に生活体験・社会体験・自然体験をバランスよく組み合わせている。教員は、前年踏襲ではなく常に課題意識をもち、授業改善に取り組むことで、子どもたちが興味関心を抱くような授業を実践している。以上のように、高尾山学園では子どもたち一人一人の状態に応じ、子どもの心の安定を図りながらの適切な学習支援で、基礎学力の向上と、集団的・体験的な学習や活動の機会を多く取り入れて、社会性を養うことを目ざしている。「不登校状態となった児童・生徒を受け入れ、不登校状態及び未学習部分を改善するとともに、さまざまな体験活動や学習活動により、社会への適応や自己に自信がもてるよう育成し、これを継続的に行うことで、誰一人取り残さない教育及び社会全体のウェルビーイング実現に貢献する」という学校長の考えのもと、教職員と教育委員会が一体となり、不登校児童・生徒の支援に取り組んでいる。

「学びの多様な学校」設置を検討している自治体に向けて

子どもたちが不登校になる時期が一



●高尾山学園の成果が認められ、平成17年7月から同自治体でも文部科学省の認可を得ることができるようになった。

律でないように、不登校から回復する時期もさまざまである。最も適した時期に適切な支援ができるか、ということが大切である。「学びの多様な学校」を開設するだけでなく、そこにどのような不登校児童・生徒をつなげていくか、どのような配慮が必要か、というアセスメントが重要である。そのアセスメントをもとに「学びの多様な学校」に再度通うことができるようになった子どもたちが、学校での体験を通して「生きる力」を身につけて社会に巣立っていく、そうした子どもたちが増えていくことを願っている。

八王子市立小・中・義務教育学校における不登校総合対策「つながるプラン」の策定

令和5年6月に、八王子市立学校に

おける不登校児童・生徒の状況や文部科学省の「COCCOLOプラン」等をもとに不登校総合対策として策定した。本プランは、令和9年度までの5か年で集中的に不登校対策に取り組む方向性を示したものである。達成目標は二つあり、①学校内外で専門的な相談・指導を受けていない不登校児童・生徒を0にすること。②中学校卒業後に希望進路をもつ生徒の進路未決定者を0にすることである。

「つながるプラン」は四つの取組の方向性を柱とし、それぞれ「学びがつながる」魅力ある学校づくり、「支援がつながる」支援ニーズの早期把握と組織的対応、「社会がつながる」多様な教育機会・居場所の確保、「未来につながる」社会的自立をめざした中・長期的支援」とした。

令和6年度は、高尾山学園のノウハウを全市立学校に展開するため、各学校の登校支援コーディネーターを対象に一日の实地研修を実施した。高尾山学園で蓄積された知見を各学校に展開することで、不登校児童・生徒への対応と不登校の未然防止を図っている。

「みんなが八王子の宝」をキャッチフレーズに、不登校児童・生徒が、自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す支援の視点を立ち、不登校の総合対策に取り組んでいる。

多様な学びを考える

一人一人に寄り添い、生徒を笑顔に変え、もっともっと楽しい学校へ



学校法人星槎 星槎中学校
副校長 佐藤由加子

ポイント

- ① 一人一人に寄り添い、登校したい、楽しいと思える学校にするために環境づくりが大切である
- ② 一人一人の特徴を理解し、学習面のみならず、生活面や対人面にも重きを置き、関わり合いを大切にする
- ③ 机上の学習だけではなく、宿泊や行事で培われる思いやりの気持ちや協調性を育むことが重要である

一人一人に寄り添うための『個別指導計画』

星槎中学校が2005年に開校し、早20年が経とうとしている。実はその20年よりさらに前、宮澤学園中等部というフリースクールが星槎中学校の前身であるが、その当時から今まで変わらないもの、変わってはいけないと考えるものがいくつかある。その一つとしてまず重要であるのが本校の根幹ともいえる、生徒個々に最もふさわしい指導を行うために、一人一人に合わせて作成される個別指導計画である。各生徒の状況の的確な把握や、心理検査の結果などを踏まえて、学習面や対人関係を含めた生活面に関する指導目標や指導課題を明らかにしたうえで、必要な具体的な指導方法や内

容を考えたものである。これは本校の教育活動の基本になっており、この計画を踏まえて日々の教育を実践している。例えば、毎日登校することに慣れておらず、友達との関わりに不安を感じている生徒には、毎朝、まずは職員室に挨拶をしに来ることを目標にし、担任と話をさせることで不安を軽減させ、一日のよいスタートが切れるよう

にサポートをしている。また対面で課題を抱える生徒には、授業中に個別カード(写真①)やチェックシート(写真②)などを用いて視覚的に支援し、自身が落ち着いた気持ちで一日を過ごせるようにしている。生徒はこれらの目標があることで安心して学校生活を送ることができ、帰りの会には担任や副担任が一人一人と振り返りの時間を設け、褒めたりアドバイスをしたりしながら翌日の登校につなげる。

現在は『ステラプラン』というシステムにより、生徒と教員が評価した内容が保護者も即時に共有でき、帰宅後もすぐに家庭内で子どもが学校でがんばったことなどについてコミュニケーションをとることができる。生徒ががんばったことは、チャット機能で全教職員に共有し(ほめチャット)、毎日、担任のみならず副担任、教科担当者、部活の顧問、管理職からも生徒

写真①



写真②



● 生徒一人一人に応じた個別カードとチェックシート

にたくさん声をかけ、生徒に「褒めのシャワー」を浴びせ「明日も学校に行きたいな」と思ってもらえるような仕組みを作っている。

習熟度別クラスや、個々の進度に合わせたワークシートを活用

本校の授業は教科書を使わず、独自のワークシートを使用して行われている。小学校時代になかなか学校へ足が向かず、学習面で遅れていたたり、学び方がゆっくりであったり、またある教科では学年相応を超えた内容を理解していたりと、学習進度は生徒によってさまざまであるため、皆一斉で教科書を使用するのではなく、習熟度別のワークシートを使用して学習する。勉強が苦手でも得意であつても、それぞれが個々のペースで安心して学べる配慮をし、また、ワークシートで授業が完結したものとなっているので生徒が達成感を得ることができ、学習意欲につながりやすい。教科ごとに習熟度が分かれているので、得意教科は伸ばし、不得意教科はゆっくりとしたペースで安心して学べている。わからないところをそのままにせず、学習への不安が減ると「学校へ行つて勉強したい」という向上心につながる利点もある。

他者とうまく関わるためのトレーニングで学校生活をより豊かに

本校の特色ある授業科目の一つに、SST『ソーシャルスキルトレーニング』というものがある。本校では社会生活に必要な知識や技術、コミュニケーション能力の向上にも重点を置いている。小学校時代に他者と関わりたけいけどうまくゆかず、自分からその機会を避け、苦しく悲しい思いをしてきた生徒も少なくはない。そのような生徒に対し、小グループで会話の機会を作り、あいづちのうち方をはじめ、会話をより豊かに、楽しくするにはどうしたらよいかを考えさせ、体験させるトレーニングを行い、それを学校生活に般化している。実際に学んだことを実践した生徒は「話が盛り上がつて楽しかった!」とか、楽しさのあまり思わず喋り過ぎてしまい、友達から「今のはちょっと言い過ぎだよ」と声をかけられ喧嘩にならずに済んだなど、学校生活の中で会話を楽しんだり、相手によって関わり方を変えてみたり、他者と上手に関わる術を身につけられるようになっていく。相手を知り、人と関わることの楽しさを本校で初めて知る生徒も多い。

体験を通して発見する仲間との絆

本校には年間を通して多くの学校行事がある。授業だけを学びの場とせず、仲間とともに関わり合い、さまざまな体験をすることや、一人一人が活躍する機会を設けることで生徒たちは大きく成長していく。不登校を経験した生徒は、宿泊行事に参加することを不安に感じる場合もあるが、夏と冬の宿泊場所を同じにすることで不安が軽減されるので、そのような配慮をしている。また、学年ごとではなく同部屋に必ず上級生がいる状態にしているため、不安なことを上級生に相談することもできる。上級生のほうも一年めに先輩からフォローしてもらった経験があるので、後輩への声のかけ方が抜群である。

最終的には不安なことを軽減し、また乗り越えながら「宿泊行事に参加してよかった」という集団の達成感を味わうことができる。行事は一人一人が役割を担うことでやりきろうとする心構えもでき、行事が終わったあとは生徒の大きな成長がみられる。

生徒を笑顔に変えるための三つの約束

学びの多様化学校である本校では、生徒が学校に合わせるのではなく、学

校が生徒に合わせ、登校が楽しくなり、自信がつき、もっと学校へ通いたくなる仕組みづくりをしてきた。学校とは本来、行きたい場所でないならばない。もちろん学習面、生活面、対人面、簡単にクリアできないことも多くあるだろうが、そんなときでも立ち返るべきは、学校は相談できる仲間、先生がたくさんいる「安心できる場所」でなくてはならないことである。

本校では月一回の保護者会を開催しているため、保護者どうしのつながりも深く、同じ悩みをもつ保護者どうしがお互いの子どもをサポートできるようにもなる。子どもが安心して自信をもつて登校できるようになると、保護者のかたも元気になり、学校全体に笑顔の連鎖が広がっている。

我々教職員一同、学校が楽しく通いたい場所だと感じてもらえるように、人を認める・人を排除しない・仲間をつくる、という星槎の三つの約束をもとに、生徒一人一人に寄り添い、一人一人を認め、関わり合える環境づくりにこれからも邁進していきたい。



コシヒカリでつながる南国鹿児島と 北国新潟の学びの交流ネットワーク

新潟大学名誉教授

宮園衛

鹿児島県南さつま市立金峰学園

校長・内村健二／教諭・井上百代

新潟県新潟市立鏡淵小学校

校長・後藤和広／教諭・宮本裕介

南国鹿児島から、コシヒカリの主産地・新潟との「コシヒカリ交流」が生まれました。「コシヒカリ交流」は、鹿児島県南さつま市立金峰学園の特例教科「金峰学」開設に始まります。金峰町は超早場米「金峰コシヒカリ」の産地です。子どもの関心は金峰コシヒカリから、新潟へと広がり、新潟大学教職大学院生や新潟市立鏡淵小学校の子どもたちとの学びの交流に発展します。

金峰学園…特例教科

「金峰学」発の

「コシヒカリ交流」

南さつま市立金峰学園は、2023年4月に鹿児島県内10番めの義務教育学校として開校した新しい学校です。開校当時の児童生徒数は前期278

人、後期141人の合計419人。

「グローバル人材の育成」国際社会に通用する能力・視点・経験をもち、地域の活性化や発展に貢献できる人材の育成」を掲げています。その中核にあるのが、特例教科「金峰学」です。9年間の学びを通して「命と人のつながりをふるさとに学び、世界に伝える探究学習」を目ざします。「コシヒカリ交流」は、この「金峰学」の学びから誕生しました。

「コシヒカリ交流」の主人公は「金峰学」において、地元特産品である「金峰コシヒカリ」の生産・探究活動に取り組んでいる5年生です。「金峰コシヒカリ」は、桜の便りもまだ届かない3月初旬に田植えを始め、台風シーズン前の7月中旬には収穫し、全国に先駆けて出荷する超早場米です。5年生は生産農家の人からアドバイスを受けながらこの特産品の生産活動に取り組み、1年間かけて「金峰コシヒカリ」について探究を深めます。開



金峰学園から新潟大学教職大学院へ贈られた米

校1年めの5年生は「自分たちが収穫した米を食べた人が元気で幸せになるように」との願いを込めて『金峰コシヒカリ元氣1号』と、2年めの5年生は『元氣2号』と名づけました。そして、探究活動の関心は学校・地域の枠を超えて新潟に広がりました。

新潟大学教職大学院との出会い

開校1年めの2023年11月。新潟大学教職大学院必修科目「特色ある教育課程の事例研究」の中で、金峰学園の学校長が義務教育学校としての教育課程編成についてオンライン講義をする機会がありました。その縁で教職大学院生が11月開催の金峰学フェスタでコシヒカリ学習発表会にオンライン参加し、5年生と新潟大学教職大学院生との交流が始まりました。

金峰学園では、子どもの学びにおける「必要感」を大切にしています。「金峰コシヒカリ」を生産し探究活動に取り組む子どもなら、コシヒカリの主産地・新潟に関心をもち、学びを広げられるだろうとの見通しがありました。人と人との交流は、米の交換・食べ比べに発展します。子どもたちは教職大学院生・教員に『元氣1号』を、逆に新潟からは新潟産コシヒカリが贈ら



■金峰コシヒカリと新潟コシヒカリの食べ比べ

届け、相互交流が深まりました。

さらに現職教員院生が、2024年3月に金峰学園を訪問しました。金峰学園の教育課程を学ぶとともに、5年生に「新潟の米作り」、3年生に「雪国の暮らし」の出前授業を行い、直接交流へと発展しました。

新潟市立鏡淵小学校 5年生との交流へ

2年め（2024年度）には、新潟市の市街地にある鏡淵小学校（当時、全校児童194人）5年生との「コシヒカリ交流」に発展します。鏡淵小学校の教育目標は「高め合う子」です。「郷土を愛し、複雑に変化し続ける社会情勢と向き合い、他者と協働してよりよい未来社会を切り開いていく資質・能力を備えた子ども」の育成を目指しています。

両校の交流は、7月から12月までの

れました。子どもたちは家庭科授業で両地域のコシヒカリを食べ比べ、その映像や感想を大学院生に

間にオンラインで4回実現しました。交流のねらいは「お互いの地域に出会い、友達になる。南国・鹿児島と北国・新潟のコシヒカリ栽培の特徴や違い、両地域の生活について興味関心をもって探究を深めていく」とです。

鏡淵小学校は1クラス、金峰学園は2クラス合同の交流です。第1回の新潟と鹿児島島の紹介、校舎からの風景紹介に始まり、金峰学園フェスタの紹介、コシヒカリに関する相互の質問、食文化や方言等の質問・紹介へと対話が広がりました。

最後に「コシヒカリ交流」の価値、可能性について、両校の児童と担当教員の声を抜粋して紹介します。

〈金峰学園児童の声〉

- ・新潟での栽培方法や工夫、米を育てる水の入手経路を知りたい。

- ・金峰コシヒカリのおいしさや特徴を具体的にエピソードや表現で伝えたい。

〈鏡淵小学校児童の声〉

- ・次の交流が楽しみです。質問された新潟県のことを自分でも調べ、知らなかった

ことを学ぶことができた。

〈金峰学園教員の声〉

- ・新潟の同級生と意見交換でき、相手の反応を感じながら、楽しく学び、探究意欲や課題追及心が高まっている。

- ・自分のふるさとのよさを再認識し「知って欲しい、教えたい」という願いをもって学習できる。

〈鏡淵小学校教員の声〉

- ・質問を受けて新たな視点をもらい、子どもの意欲が高まることがわかった。

- ・総合学習から社会科にも派生し、南国の生活様式に問いが生まれた際「金峰学園のみんなに聞いてみようよ」との声があがるほど、子どもの心の中に鹿児島島の5年生がいた。



■オンラインで行われた「コシヒカリ交流」。上が鏡淵小学校。下が金峰学園の様子



芝生学から広がるSTEAM教育

「島・人・海」をつなげて考える

「芝生学」から「海に広がる『芝生学』」へ発展

式根島中学校の美しい芝生の校庭は島の運動会等、活動の場として利用され、生徒はもちろん島民などの多くのかたがたに愛されていますが、維持・管理が課題となっていました。そこで、令和元年度に芝生の保全と教育を両立させる「芝生学」を設けました。さらに、令和3年度からは島と海をつなぐSTEAM教育（教科等横断的に学びながら課題を発見し、解決力を育成する教育）として「海に広がる『芝生学』」に発展しています。

極少数人数教育の利点を活かせるSTEAM教育

島しょ地域の教育は極少数人数教育であり、ティーム・ティーチングや小中連携が積極的に行われています。ティーム・ティーチングはSTEAM教育のきっかけとなります。また、極少数人数での学習は、生徒が教員と一緒に

に未知の課題に取り組む場面が多々あり、探究学習の実施に最適です。SDGsに「海の豊かさを守ろう」「陸の豊かさを守ろう」という項目があることから教科を超えて島と海をつなぐ「芝生学」を発案し、令和2年度および4年度「ちゅうでん教育振興助成」と令和3年度および5年度「海洋教育パイオニアスクールプログラム」の助成を得て実現しました。



↑ 2台のICレコーダーに記録したメトロノームの音で音の速さを調べる授業。生徒の学習は学校から海へと広がっていく

東京都新島村立式根島中学校

元主幹教諭 中里 直

（現 渋谷区立上原中学校）

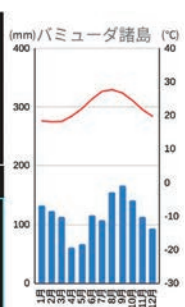
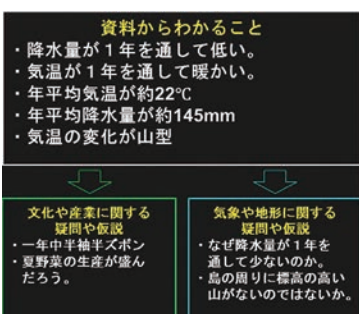
教諭 中村 裕之

主任教諭 高橋 勇人

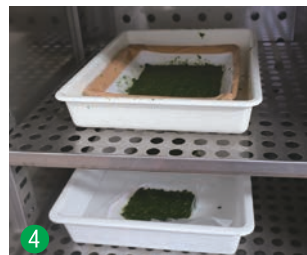
（現 中野区立中野東中学校）

芝生の
密度を
調査中！

↑ 生徒は一定面積の芝草の本数から、方程式で校庭全体の芝本数を求める学習を行った



↑上／生徒と教員と一緒に雨温図の意味を考える
下／「世界の雨温図の意味を探る」探究学習の成果



- ①「式根島からプラスチック問題を考える」という学習の中で、海中のプラスチックをプランクトンネットで集める生徒
- ②顕微鏡で海中のマイクロプラスチックを探す様子
- ③ふるいにかけて、海中のプラスチックを採集
- ④島の特産品・アシタバでハガキを作る

郷土理解学習「式根島未来会議」と各教科の実践

総合的な学習の時間では、式根島の現状を理解し、未来について考える「式根島未来会議」という郷土理解学習を行っています。この中で、STEAM教育の実践として、「式根島の美化活動」というテーマで、美化看板の設置、式根島の特産品であるアシタバを用いた代替プラスチック製品の考案や海岸・海水に含まれるプラスチックゴミの調査を行いました。教科では「校庭の芝生の本数調査」と「海水の塩分濃度」に関する数学科と理科の合同授業や、海岸で「音」に関する音楽科と理科の合同授業を行いました。また、「式根島の地形と気候の特徴を調査する」というテーマで、身近な環境について探究する理科と社会科の合同授業を行いました。これらの学習から「世界の雨温図（ある地域の月別平均気温と月別平均降水量のグラフ）の意味を探る」というテーマで理科、社会科、国語科を横断する授業へと発展しました。

身近な生活から世界に広がるSTEAM教育

「世界の雨温図の意味を探る」の1時間めは気象庁ホームページにある

世界のさまざまな地域から一つを選び、気象データ（平均値）から雨温図を作成し、その地域の自然環境や文化について仮説を立てました。2時間めは選んだ地域の自然環境や文化を調べ、資料やインターネットを活用して発表スライドを作成し、3時間めは発表と協議を行いました。日本語の資料が少なく、インターネット検索も困難であるため、関連資料（世界の雲の動き・欧州気象衛星開発機構「A year of weather 2020」、景色や産業等：Google Earth、政府観光情報等）を用い、外国語の資料は翻訳して活用しました。生徒は既習内容に基づいて必要な資料を選定し、理科と社会科で得た知識や技能を活かして教員とともに考え、議論しながら考察を導き出し、国語科で学んだ表現方法を用いて発表することができました。

教育の課題解決に貢献

実践はホームページや東京七島新聞への掲載により、多くの人々に伝えることができました。島には教育に活用できる資源が数多くあります。それらを活用し、その知見を発信することで世界とつながれば、教育の課題解決等に貢献できます。島の特性を活かして、陸地と海のつながりを理解する取組を継続していきたいと考えています。

千葉

未来を生きる 青少年を幸せに導くために

四街道市教育委員会教育長 府川 雅司

「一人一人の出会いを大切に、未来を生きる青少年を幸せに導く一助としたい」という願いをこめて、平成12年9月に青少年育成センターだより「一期一会」第1号が発刊されました。まもなく300号になるこの情報誌には、四街道市の青少年の現状や当センターの取組の紹介だけでなく、巻頭言の執筆者の思いや願いなどが溢れています。

平成22年に初めて市内の中学生が巻頭言を書きましたが、そこには生徒会長を務めた1年間で取り組んだことに加え、達成感や悔しさ、中学校の先生がたや仲間への感謝が記されています。その後も、多くの中高生がこの「一期一会」の執筆者として夢を語り、未来への提言を述べ、関わった人への感謝を綴ってくれました。

四街道市では青少年の健全育成を目的として、青少年補導委員と市内高校生と一緒にパトロールを行い、高校生たちが小中学生の安全を大人とともに見守ってくれています。参加した高校生からは「小学生のためにも、平和な町を維持していきたいと思った」などの感想が聞かれました。また、青少年健全育成推進大会では、小学生から高校生までの代表者が住みよい町づくりや明るい未来に向けて問題提起をしてくれたり、大会の看板を高等学校書道部の生徒が筆書きで書いてくれたりしています。このような若者たちの言動には、大人には表現できない躍動感や生命力、そして、四街道市の未来への希望を感じます。

今から14年前に、「一期一会」において「安全で住みよい四街道としてさらに発展していくことを願いたい」と巻頭言で語った少年は、その後、四街道市役所の職員となり市民のために尽力してくれました。この少年と形は違っても、本市の子どもたちが自らの夢の実現と明るい未来のために、一步一步進んでいける町づくりに全力で取り組んでまいります。



全国各地のさまざまな取組を紹介します。

北海道

問題発見・解決能力の 育成を目指して

～総合的な学習の時間を中核とした継続的な取組～

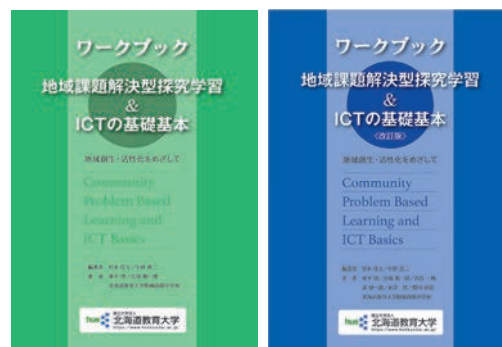
北海道教育大学附属函館中学校 副校長 黒田 諭

変化の激しい社会を生きる子どもたちにつけたい資質・能力の一つに、問題発見・解決能力がある。各教科等において、物事の中から課題を見だし、解決方法を探して計画を立て、情報を収集するとともに集めた情報を整理・分析し、結果をまとめたり発表したりする学習については、今後より一層重視していきたい。

生徒が自分で探究課題を設定してその解決にあたるという授業実践は、1983年度の「フリータイム」という本校独自の学習活動に遡ることができる。「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について（答申）」文部科学省（1998）において、「総合的な学習の時間」の創設が盛り込まれてからは、それまでの取組を土台にして、総合的な学習の時間としてのカリキュラムを再構築するなど、形を変えながらその取組を継続してきた。

現在は、総合的な学習の時間を「探究」と呼称し、教育活動の中核に位置づけている。探究的な見方・考え方をはたらかせ、自らの興味や関心に基づいた事象に関する横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する取組を進めている。

北海道教育大学や北海道教育大学教職大学院との連携も年々強化してきた。具体的には、大学および教職大学院の教員による出前授業や大学生による授業のサポート等を組み込みながら、地域課題解決型探究カリキュラムの開発および実践を進めている。その取組の一つとして、令和4年度に『ワークブック 地域課題解決型探究学習& ICTの基礎基本』を刊行した。また、その改訂版を令和5年度末に刊行。指導内容や指導方法等をどこまで構造化して示せるかは今後の課題である。これらは北海道教育大学学術リポジトリからダウンロードすることができる。



『ワークブック 地域課題解決型探究学習& ICTの基礎基本』（左）と令和5年度末に刊行した改訂版（右）

鹿児島

「ウミガメ科」を通した環境教育の取組

南九州市立九玉小学校 校長
(元 肝付町立岸良学園 校長) 西 康隆

鹿児島県大隅半島南西部に位置する岸良浜はウミガメの産卵場所です。令和5年度は、1kmあたりの産卵数が鹿児島県本土で最も多かったという調査結果が出ています。これまで26年間にわたり、学校、保護者、地域が一体となりウミガメの学習や環境保全活動に取り組んでいます。

そのような環境のもと誕生したのが、特色ある教育活動「ウミガメ科」です。ウミガメ科の特徴は次の三つです。

- (1) ウミガメ学習会→海岸清掃活動→産卵の確認→観察用卵の移植→放流会→孵化後の調査という一連の流れがあること。
- (2) 学校、保護者、地域が一体となって取り組んでおり、当初の産卵観察会から取組がアップデートされていること。
- (3) 「いおワールドかごしま水族館」と連携協定を結び、専門的なアドバイスのもと進められていること。

子どもたちがウミガメ科で学ぶことは単にウミガメの生態を知ることや、岸良海岸のゴミを拾うこと、かわいい子ガメを放流することだけではありません。一連の学習を通し、自然環境を守る活動が、いずれは自分たちが豊かな自然に守られて、生活できることにつながることを学べる場所にあると考えています。

一方、ウミガメに関わるガイドラインの変化にも注目しています。岸良学園が行っている採卵・移植・放流はウミガメの保護が目的ではなく、あくまで学習が目的という位置づけで行っています。今後、採卵・移植自体ができなくなる可能性もあるとのこと。このため、ドローンを使って上陸数を計測するという研究も始めています。このように今後もさまざまな工夫を凝らし、時代に合った学習につなげていけたらと考えています。



ウミガメ放流会の様子

静岡

今こそ脱コロナ禍 みんなで『アサフィット』

小山町立明倫小学校 教頭
(元 小山町教育委員会 指導主事) 滝口 卓巳

小山町教育委員会ではコロナ禍により失われた3年間に生じた学校の諸問題を解決するために、魅力ある教育課程の編制を軸に改革に入った。その取組の一つである『失われた「子どもたちの体力」づくりのあり方について』を紹介する。

スポーツ庁の令和6年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の報告書によると、体力の合計点は新型コロナウイルス感染症蔓延前の水準に至っていない。小山町ではこの結果を踏まえるまでもなく、児童の体を動かすことへの意識が低下し、学校生活や生活習慣の見直しを余儀なくされている。こうした実態を受けて「小学校朝運動プロジェクト」と称して授業開始前の時間の改革を目指した。

このプロジェクトのねらいは身体的な体力向上だけではない。ストレス軽減等の精神的な健康、脳の活性化による集中力の持続、人との関わりからコミュニケーション能力の向上、規則正しい生活づくり（睡眠の質や食事等）や生活習慣の改善から、ポジティブな気持ちで一日をスタートすることを目指す。また、特別支援を要する児童や不登校傾向の児童の生活リズムづくりまでも意識している。

まず、各小学校から若手教員を選出し、プロジェクトチームを立ち上げ、町指導主事、町民トップランナー（青学駅伝部出身）の役職職員もメンバーに入れた。あくまでも各小学校の若手教員が主体的に活動を推進することに価値をおき、先生がたと子ども主導の活動としたい。

朝にエネルギーを高める活動（フィットネス）という考えから『アサフィット』という名称で令和7年度から取り組んでいく予定である。

また、この活動をコミュニティ・スクールと連動させ、地域（保護者）ボランティアへ活動を広げていきたい。学校・家庭・地域で子どもを育てる気運を高め、教職員の働き方改革にもつなげていく。『アサフィット』の効果により、子どもだけでなく全ての人の日常生活が充実することを期待している。



第一回プロジェクト会議は2025年3月初旬に開催。「アサフィット」について関連な意見交換を行った

子どもの心理とコロナ禍 ～苦難を生む“何ものか”を探る～

東京学芸大学教授 松尾 直博



■インターネットの利用内容で増加しているものの内訳
（令和元年と令和5年の比較）

	令和元年	令和5年
勉強をする	41.6%	72.9%
検索をする	55.2%	83.6%
ニュースを見る	29.0%	50.2%
動画を見る	81.5%	93.6%
投稿やメッセージを交換	69.1%	71.7%

と明らかに増加している。また、その中で特に増加しているものの内訳を紐解いてみると、勉強、検索、ニュース、動画等の閲覧の増加が顕著だが、投稿やメッセージの交換はあまり増加していない。勉強や検索が増えているのはGIGA端末の普及が影響していると思われる。

サイバー空間に生きる児童生徒

児童生徒が示すさまざまな課題を理解する際に、その子ども自身の心身や機能の問題にフォーカスするだけでは不十分であり、児童生徒が生きている社会についても考える必要がある。現代においては特に、児童生徒がどのようにサイバー空間（インターネット空間）とつながっているかを検討することは必須であるといえよう。

気・空気・プネウマによる支配

人類学者・磯野真穂は著書『コロナ禍と出会い直す 不要不急の人類学ノート』の中で「自分のうちにありながら、外にもあり、全体をつなげる目に見えない『何ものか』の存在にふれ、それを『気』と呼んだ。評論家・山本七平は『空気』と表現している。物理空間とサイバー空間での人と人、人とモノとのつながり、そのつながり方やそこで交換される情報や情念によってその『何ものか』が生まれ、人を支配するようになる。西洋では『プネウマ』がそれに該当し、この『何ものか』は非常に手ごわいモンスターにもなり得る。

例えば、磯野は前述した著書の中で、コロナ禍において『気の緩み』という考え方が人々の行動を過度に制限していったプロセスを記述している。閉塞感、絶望感、虚無感等はこの『気』や『空気』の代表格であり、児童生徒もこうした『何ものか』の影響を物理空間で、また特にサイバー空間で受けているように思われる。

〈参考文献〉

磯野真穂『コロナ禍と出会い直す 不要不急の人類学ノート』柏書房／2024年 山本七平『空気』の研究』文藝春秋／2018年

児童生徒の心に及ぼす影響

動画やニュース、SNSによる配信の中には不正や誹謗中傷、先行きの暗い話が少なくない。地域社会の機能が衰退している状況下に児童生徒がある場合は、物理空間でよき大

人や社会とふれ合う機会が少なく、インターネットを通じて直接的に世界からの大量の情報と情念に曝されて、閉塞感のある世界にふれ続けてしまうことになる。

また、サイバー空間に浸りきった行動様式は「物理的に学校に行かないと学べないことはあるのか？」という考えを生み出しかねない。学校ではアクセス不可な情報があるなど制限も多いからである。そして、サイバー空間と物理空間の両方の社会に恐怖や不満を抱き、自分と世界の未来に希望を感じられないという絶望のループに入ってしまう可能性がある。

インターネットが児童生徒に与える悪影響としては、友人とのメッセージの交換に大量の時間を費やし学習時間や睡眠時間に影響が出る、悪意のある人物とのつながりができるなどが懸念されることが多い。しかし、それ以上に広範で強大な影響は、物理空間やサイバー空間で生じている『何ものか』に児童生徒が浸ることにより生まれているのではないだろうか？

松尾直博 (Naohiro Matsuoka)

1970年福岡県生まれ。筑波大学第二学群人間学類卒業、筑波大学大学院博士課程心理学研究科修了。自治体の発達相談心理判定員や母子保健センターの心理判定員、スクールカウンセラーなどを務める。公認心理師、臨床心理士、学校心理士、特別支援教育士スーパーバイザー。著書に『新時代のスクールカウンセラー入門』（時事通信社）、「絵でよくわかるこころのなぜ」（学研プラス）など。

戦後80年一。 資料館が新たな語り部に



埼玉県川口市教育委員会
教育総務部 文化財課

井出 祐史

今年で戦後80年一。社会科の授業や総合的な学習の時間で、あるいは博物館や資料館で、実際に戦争を体験したかたから当時の体験談を聞く。平和教育や歴史学習において、効果的で意義ある学習の一つである。しかし、近年ではさまざまな要因からその実施が困難になってきている。そこで川口市で実施している、郷土資料館が新たな語り部としての役割を担う博学連携の取組を紹介したい。

①戦争体験者の高齢化とコロナ禍

「戦争体験を聞く」学習が今、直面している問題がある。それは、戦争体験者の多くが高齢化していることだ。例えば、終戦の年・昭和20（1945）年に10歳だったかたは今年、90歳になる。ご高齢のかたがたにとって、いくつもの学校や教室を回ったり、授業中に長い時間お話を続けたりすることは、体力的に大きな負担がかかる。さらに、コロナ禍をはじめとする感染症の流行・拡大が追い打ちをかける形となり、感染防止の観点から、戦争体験を聞く授業そのものが途絶えてしまった学校も少なくない。『戦争を知らない子供たち』が歌われた、昭和45（1970）年開催の大阪万博からもはや55年が過ぎ、このままでは戦争の記憶が途絶えてしまう危機的な状況といえる。



●市内公園に建つ戦没者慰霊碑と平和記念碑

②郷土資料館が新たな語り部に

そこで本市では、郷土資料館で戦争に関する資料を活用した「歴史教室」を実施している。郷土資料館には、市内小学校から発見された戦

時中の学校日誌をはじめ、当時の子どもたちが図工の授業で描いた風景画や戦意高揚を図るポスター、発掘された防空壕の写真や不発弾、校舎の建て直しで出土した銃剣や砲弾など、子どもたちにとって身近な「学校」にフォーカスした資料がたくさん収蔵されている。これを使わない手はない。



●戦時中における市内小学校の学校日誌



●市内中学校の校舎立て直しで出土した銃剣と砲弾

また、Web会議ツールを利用することで複数の学校を同時につないで授業を行っている。これにより、希望した全ての学校が参加することができるし、学習者側は貴重な資料を手にとるように見ることができる。本事業を始めた令和4年度から今年度までの3年間で、実施した授業の回数はわずか25回（1回45分間）。しかし、延べ102校8,267人の小学6年生が参加した。そのうえ、担当者が替わっても資料と授業のノウハウは引き継がれるため、担い手不足に悩む必要がない。

③実施報告

～授業を受けた児童生徒の感想から～

最後に、今年度、本事業に参加した児童生徒の学習感想を紹介する。

教科書で勉強したときはあまりそう思わなかったけど、もう二度とこんなことは起きてはいけなと実感した。／もっとくわしく戦争のことを知りたいと思った。今度、おじいちゃんや、ひいおじいちゃんに話を聞いてみたい。／今も世界で戦争があるから、こんなことが起きているのだと思いました。／中学校へ行っても歴史を真面目に学び、過ちをくり返さないようにしたい。／戦争のひさんさをくり返さないように、ちゃんとした政治にしたい。

「読みたい」ときに傍にある 本棚のような存在でありたい

ほ・つ・と・な・出・会・い

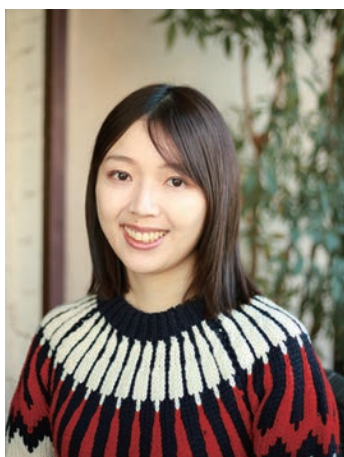
文芸評論家 三宅 香帆さん

本が読めなくなる社会への提言

— 会社から帰宅すると、スマートフォンでSNSや動画は見るのに読書をする気力がわいてこない。あんなに本が好きだったのに……。

2023年に上梓した『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』は、自身の社会人経験から着想を得て書き上げた作品です。労働と読書の関係を紐解きながら、仕事と文化的趣味を両立できる働き方を提唱する内容なのですが、想像を超える反響をいただき驚きました。働き方について共感いただいたのはもちろんのこと、実は多くの人が「仕事とスマートフォン漬けの毎日」に危機感を抱いていたのではないのでしょうか？

確かに情報を得るにはインターネットのほうが効率的です。「この内容は違う」と思ったら即座に離脱して別のページに飛ばせばよいのですから。一方、書籍で知識を得るためには、冒頭から最後まで読み通す必要があります。その途中には知りたい情報と直接関係のない周辺の文脈なども多分に含まれています。今の自分とは離れた世界に偶然ふれることができるのが読書の醍醐味でもあるのですが、時間的にも精神的にも余裕がないと、それらの情報が余分なノイズに感じられ、読むのが辛くなってしまうのです。拙著ではこれを、働き世代が読書離れをしてしまう一因と位置づけています。



読書のために会社を退職

私自身のことに話を戻すと、小さな頃から本の虫。友達と遊ぶよりも本を読んでいるのが好きという文学少女でした。他のエンターテインメントもある中、なぜ本だったのかといえば、

一人の著者による創作物であることが私には向いていたのだと思います。読書は著者との一対一の対話のようなもの。人生において悩んだり迷ったりしたときはいつも本を開き、その中に答えを探していました。そんな私にとって、就職したからといって書店にも立ち寄らず、電子書籍ですら読む気がなくなることは耐え難いことだったのです。仕事そのものにはやりがいを感じていたのですが、3年半で辞め、2022年に文芸評論家として独立しました。

現在は、一日一冊のペースで読書を楽しみつつ、評論やブックガイドなどの執筆を中心にお仕事をしています。

子ども自身の興味を大切に

「朝の読書活動」などの取組のおかげで、小学生の読書量は増えています。10分間、短い物語にふれるだけでもフィクションというものの基本構造がわかるようになり、読書の基礎体力がつくので、すばらしいと思います。児童書に力を入れる出版社や素敵な図書館も増えていますし、昔より子ども読書環境は充実していますね。

本選びに悩む子に私がよくおすすめする方法は、その子自身が、今まさに取り組んでいる事柄をテーマに物語を選ぶこと。例えば、野球をしているなら野球少年が主人公の話、科学が好きならその関連の読みものを。既に興味をもっていることなら比較的読み進めやすく、そのうち読書に慣れてきたら違うジャンルや少し難しいものに手が伸びることもあるかと思っています。いわゆる名作物語じゃなくてもいい。好きな漫画やアニメのノベライズ作品、写真や絵がたく

さんある絵本やライトノベルでも。子どもが楽しんでいことが何より大事です。

一方で、自身も読書が嫌いな子に無理やり読ませる必要はないとも思っています。もし読書に興味はあれども「何を手に取っていいかわからない」のならば「こんな作品もあるよ」「こちらはどう？」と手を差し伸べ、読書の楽しさや読むコツを伝えたい。読んでみたい気分るときにふと目に入る、部屋の片隅にある本棚のよう存在でありたいですね。

学校現場こそ働き方改革を

教育現場の働き方改革の必要性が叫ばれる昨今ですが、先生がたにはプライベートで読書や趣味を楽しむゆとりはあるのでしょうか？ もし、かつての私と同じように悩まれているならば、子どもたちにいちばん近いところにいる先生がたこそ、余裕のある働き方ができるようにと願ってやみません。



『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』(集英社新書)

三宅香帆 (kaho miyako)

文芸評論家。京都市立芸術大学非常勤講師。1994年高知県生まれ。京都大学人間・環境学研究所博士後期課程中退。リクルート社を経て2022年に独立。主に文芸評論・社会批評などの分野で活動。2023年に上梓した『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』(集英社新書)は30万部を超えるベストセラーとなり大きな話題を呼ぶ。「好き」を言語化する技術「ディスカヴァー・トゥエンティワン」、『人生を狂わす名著50』(ライツ社)など、著書多数。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆恐竜研究者・小林教授が人生の転機において「いまを生きる」という映画から「遠い先ではなく今を大事にしよう。興味をもったことを全力でやってみよう」という気づきを得られたというエピソードに感銘しました。キャリア形成においてとても意味深い言葉です。やりたいと思うことを一つずつ積み重ねてゆくことに自信がもてる内容でした。
- ◆知っておきたい教育NOW。修学旅行に関する内容を読ませていただき、コロナ禍を経て現在の修学旅行の課題や取組、工夫などがよく理解できました。他国にも例を見ない日本独自の教育活動である「修学旅行」、大切にしていきたいと感じました。
- ◆北から南からに紹介されている取組は、いずれも今、教育現場で課題となっている領域での実践であり、大いに参考になる。もっと具体的に知りたいと思った。

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

教育出版は、無限の可能性を秘めた「学びのチカラ」を教科書という形で世に送り出し、子どもたちの成長に貢献してきました。

これからは学びの「場と機会」を、家庭へ、地域へさらに社会へと広げていきます。学びのチカラで「自問、問い、考え続け、行動し、社会を創っていく人」の成長を支えながら未来へとつなげていく。そのような次代の教育をリードする企業でありたいと考えます。

教育出版